

地域を基盤とした子育て支援 —子育ての当事者である親をケアするつながりの構築は可能なのか—

真継和子*

Community-based Child-Rearing Support: How Can We Create
Organic Relationship between Parents and Local Community?

*Kazuko Matsugi

*Osaka Medical College, Faculty of Nursing

キーワード：

地域	local community
親	parents
主体性	independence
有機的つながり	organic relationship
子育て支援	child-rearing support

I. 子育ての場としての地域とは

少子化・核家族化など家族形態の変容や地域のつながりが希薄化する中で、子育てをめぐる環境も大きく変化している。子育てをする親は孤立し、育児ストレスや育児不安を抱えるなど、子育てに関連する問題は深刻化している。こうした傾向を是正していくために、国や自治体など様々な方面から支援がなされている。しかし、全国家庭児童調査¹⁾によると、公的機関等を「利用したことがある」世帯は50.2%と前回調査（平成16年度）より3ポイント減っている。また、子育てに関する事業等の利用状況も「つどいの広場や子育て支援センターなど」で25.3%、次いで「子ども会育成会」22.8%と、決して高くはない。このように子育てをとりまく環境は整備されつつも、その活用は未だ十分とは言えない。

大豆生田²⁾は、子育ての当事者である親や家族が、親子同士や地域のさまざまな

*大阪医科大学看護学部

世代とのつながりを通して、共に支え合う関係性を構築することが大切であると述べている。かつて、子育ては、地域共同体の成員による相互扶助や拡大家族における祖父母の支援により成立していた。つまり、子育てに関連する問題の解決には、国や自治体による公的支援だけに頼るのではなく、当事者を取りまく身近な場における人々と地域との関係性のあり方を探り、現代の子育て世代のニーズにあった共同体を構築することが鍵となるであろう。

子育てにおいて親は、子どもをケアできるだけの力をつけることが必要である。同時に、その力を発揮するには、親自身が支えられていることが大切である。親もまた、ケアされる存在でなくてはならないのである。こうした意味で、子育ての場としての地域は、誰もがケアしケアされる場であること、共に支え合う関係性が成り立つ場であることが望ましい。

Ⅱ．共同体の構築はいかに可能か

では、地域において『共に支え合う関係性』はどのように構築できるだろうか。子育て期にある母親へのインタビューを通して見えてきたことを中心に考えてみたい。（「」内は母親の語り。）

今回のインタビューでは就労している母親を対象とした。というのは、母親が就労しているか否かによって、共同体に求めるニーズには違いがあると予想されるからである。さらに、就労している母親の場合、子育てと仕事を両立する上でも、共同体が重要な意味をもつと考えたからである。

2.1 主体的に集団に参入する

結婚や出産を機に転居した母親は、地域では「よそ者」であり、職場が離れていたこともあり、「馴染めなかった」という。親という新たな役割を担うと同時に、新しい環境に適応し参入することは容易なことではなかった。「子連れやから、何となく」、あるいは「子どもがいるってだけ」では、「踏み込めへんかった」のである。おそらく、新しい集団に参入するきっかけや手段が必要なのだろう。

2.1.1 ○○ちゃんママでないくわたし>

育児サークルや公園での集まりに馴染めなかった母親たちは、保育所で出会い、「○

「○ちゃんママっていうのはやめて、下の名前で呼び合う」ことになり、急速に関係性が変化していった。「すごく恥ずかしかったけど、新鮮やった」という。呼び名を変えたことは、母親たちの内面に何かしらの変化をもたらしたものといえる。

名前で呼び合うことで互いに親近感を感じたことには違いない。しかし、名前のもつ意味を考えてみたい。自分の名前には周囲と区別させる機能がある。同時に、名前を呼ばれるからその意味するものになっていくという面をもつ。○○ちゃんママという名前において主体は子どもに向けられ、それは母親役割への期待を含んでいる。一方、下の名前の場合、主体は母親本人に向けられる。

人との出会いにおいて大切なことは、一人の人間として出会うことである。それは、自他の固有性・独自性を抛り所に、役割を超えた次元で出会うことを意味する。母親たちが呼び名を変えたことは、主体的に他者との関わりに入るための一歩であったと考えられる。

2.1.2 自然発生的に（脱主体的に）肯定的情動が起こる

母親たちは感情を共有することにより、さらに関係性を深めていた。仕事と子育てに追われ、「保育所のお迎え、遠くからポツンと明かりが見えて、……ちっちゃい子どもが肩並べて待ってる、毎日、苦しかった」という。さらに、「子どもを泣かせて保育所入れて、自分勝手に働いてるっていう意識が常にあった」と、親としての未熟さや困難さを感じながらも必死で子育てに取り組んでいた状況を語った。こうした中、「人も同じ悩みがある、自分だけが悩んでるんじゃないっていうのが、ちょっと楽になった」という。状況を理解し、複雑な思いを共有できる相手は、同じ悩みをもつ母親同士であったに違いない。そして、「自分より忙しい人いるのに、こんなに頑張ってるやんって。だから、もうちょっと頑張ろうって思った」と、仲間の頑張る姿から自分自身をみつめ、希望へとつなげていた。

「働きながらっていう、おっさい共通点があったから、何か、踏み込めた」という母親の意識は、母親たちの間の一体感を含んでいる。この一体感ないし同質性が母親たちの中に内在することが必要であったのではないだろうか。

2.1.3 夫を巻き込む

夫がどれほど子育てに協力するかということは、母親同士のつながりを可能にする上で非常に重要な点である。「父親が育児参加しなかったら、仕事は続けられなかっ

た」,「私だってたまには飲みに出かけたい」というように、母親が仕事を続けていく上でも、仲間との関係性を維持していく上でも、夫の理解と協力は不可欠である。

さらに注目すべきことは、夫が子育てに協力することは、「有難いし、感謝はするけど、当たり前のことと思う」という点である。この当たり前という感覚は、「夫にもある」。子育ては夫婦で協力することで成り立つという姿勢が双方にとって大切であろう。

2.2 ケア行為を楽しむ

これまで、母親が集団に参入するためのきっかけや手段についてみてきたが、それらの根底には情緒的共感があるといっていよい。しかし、この情緒的共感のもととなる情動とは、人間にとって不確かで、厄介なものでもある。つまり、不確かな情動を基盤とした一体感や同一性というだけのつながりもまた同様であることを意味する。なぜなら、人は他者の異質性をも受け容れてこそ、相互に成長できる関係へと発展するからである。ここでは、親同士が相互に成長できる関係性において必要な要素について考えてみることにする。

2.2.1 同じ立ち位置で聴く・語る

ある母親は、「保健センターの人がアドバイスとか言うてくれるんやけど、全然心に響かない。……何となく上からの。面倒な感じがした」と語った。別の母親は、「できてる関係性の中に、あとからポツン、はいれる感じではなかった」という。「上からの」あるいは「できてる関係」という言葉が示すように、この関係性において、ケアする者とケアされる者は明確に区別される。聴く・語るという場においては、開放性が必要である。それにはまず、互いに対等であるということを前提にしなければならないだろう。

一方、母親たちは、「子どもや夫、仕事の悩みを相談できる」といった、聴く・語ることのできる関係性を築いていた。それは、「同じ悩みをもつ」、「同士」として同じ立ち位置にいたからである。

聴くことは、他者の存在を認めることである。逆に、聴いてくれる他者に語ることによって状況や不安、期待を担う者同士は調和し、共同体としての絆が生まれる³⁾。情動共同体から対話共同体への変容⁴⁾であり、より凝集度の強い形で結びつくことになる。

2.2.2 縛られず、付かず離れず

専門家と母親、育児サークルや公園といった場での母親同士の関係には、ある構造的身分関係や役割関係がみられた。しかし、保育所や自主的な活動の場では、「誰が、ってことでなく、その場で」、「たまたま、よくわかってたから」というように、その時々で役割を入れかえ、活動を共にしていた。またそこでは、「企画がうまい」、「料理ができる」など、母親たちの強みを活かした営みがあった。このように、母親たちが求めている関係性は状況依存的で流動的な関係であり、会話によってその場で構築される役割関係であったといえる。

また、母親のつながりを通じて父親のつながりも生まれていた。母親らが企画したレクリエーションと一緒に参加することで楽しみを見だし、「付かず離れず」の関係を保っているという。「傍にいてって感じ」、「距離感が丁度良かった」点は大切である。それは、個人の自律における他者への依存の程度でもある。親同士が相互に成長するうえで、他者と適度な心理的距離感を保つことは、「負担感のない」関係性を維持していく重要な要素となってくる。

2.2.3 親としての見方が変わる

母親たちは、仲間の客観的な視点に導かれ、親として、人としての成長を感じていた。「最初はやんちゃな子としか思えなかった。……でも、その子の良さがわかった」、「お互いの子どものことが見えてきた」と、親同士の関係性の変化により子どもをより理解できるようになっていた。また、「みんなで子どもを見ている気がした」、「あかんこともきちんとと言えるようになったし、悪いことは悪いって、子どもも親も認めて、そこで消化できるようになった」と語った。「みんなで見ている」という感覚は、ともに責任を担うものとしての他者と母親である自分への信頼を示すものである。さらに、母親の心にゆとりをもたらせてくれるものである。この信頼とゆとりは、「認めて消化できる」というように、親である自分を振り返る動機となる。母親も子どもも納得のいくより良い関係性や、子育てしやすい環境を創出することを可能にすることができる。

また、「子どもがいろんな家を行き来するようになって、よそで夕飯食べたり、お風呂入ってきたり、そういうの楽しんでくれる」、「自分も肯定される、っていう、どんどん楽になった」という。親のつながりが深まるにつれ、子ども同士の関係の中で子どもが楽しむようになっている。「自分勝手に働いているって意識が常にあった」母

親にとって、子どもの変化は大きな喜びである。こうした心の変化は自己肯定に強く結びつくものであったと考える。

2.3 つながりを維持し共に問題解決に向かう

子育てにおいて様々なニーズが存在する地域において、既存の関係性にとらわれな
い新たな関係づくりや、親の主体性が重要であった。また、母親同士の有機的なつな
がりには、子育て環境をより良いものへと転換する一歩でもあった。ここでは、そのつ
ながりの持続を可能にする要因について考えてみる。

2.3.1 生活圏の中における日常的ケア

母親たちは保育所という場でできたつながりを核とし、ひとつの共同体を築いてい
た。「よそ者」であった母親たちは、積極的に地域に関わることもなかったし、地域と
のつながりは不要なものであった。こうした中での育児サークルや公園での集まりは
母親にとって、非日常的な世界であり、一時的なつながりでしかなかった。一方、保
育所では、「保育時間ぎりぎりまで預かってもらっている常連」として顔見知りとなり、
互いの存在が日常生活の中に位置づいていた。互いに「疲れたなあ」と気遣いながら、
「晩ごはん何にする」などの日常会話を交わす瞬間は、母親にとって安らぎの時間で
もあったと考える。

大切なことは、親同士のケアが、その場限りのイベントではなく、連続性のある、
生活圏の中における日常になるということである。

2.3.2 公的サポートの近さ

母親たちの住む町の人口は1万5千人程である。保育所への要望など直接町に提出
し意見交換をした経験もあり、口をそろえて「この町は行政が近い」という。子育て
の当事者である親が行動することができるということは、何よりも親の主体性と自律
性を高め、地域をより身近なものとして捉えなおす機会になり得る。

ニーズにあった子育て支援を提供するためには、当事者の声が不可欠である。その
ためには、一人ひとりの思いや能力をつなげ、共に問題解決に向かう草の根的な開放
性のある共同体が必要であろう。

2.4 相互ケアを楽しむ

地域を活性化し、より良い子育て環境を推進するには、人々の地域共同体への帰属感と帰属欲求の充足による安心感が必要である。そのために親は、地域との関わりに主体的意味を見出す必要がある。

2.4.1 子育てを通して得た価値観で、新しい生き方を実践する

「町内の役なんかあたりたくないって思っていたけど、やってみて案外楽しいって思えた」、「経験上、(やれば楽しいって)気づいて」、「地域に出て自分に余裕ができた。いっぱい所属する、仕事だけ、子育てだけじゃない。バランスがうまいこと、とれる」と、地域での役割を担い、主体的に世界を拓けている。親たちにとって地域は居場所となり、安定感を与える場と変化している。また、「大きくなったねとか、近所の人声の掛けしてくれる」、「子どもをみる目が増え、子どもの情報がよそから入ってくる」ことは、地域のまなざしが親子に向けられ、それが親の励みや安心となっている姿といえる。

親自らが積極的に地域に関わっていくことによって、地域は親にとって主体的意味をなすものに変化する。そして、世代を超えた人々との主体的・自律的かわりを通して、親近感のある地域共同体が可能となってくるのではないだろうか。

2.4.2 この町に腰を据える

地域という場の中にいるという感覚の中には、ある安定性がある。役割を担うことによって他者から必要とされているという事実は、地域への帰属感を充足させ、親の内面と外面とを統合させる。

「ここで生まれて、ずっと同じ仲間であられる子どもたちが羨ましい」、「この町の良さを残したい」と語る。「よそ者」であった母親は、親密なつながりとその拓がりにより、確実に、地域の中に「腰を据えた」のである。

Ⅲ. 共に支え合う、人々の有機的結びつきを求めて

これまで述べてきたように、親が希望をもち子どもへのケアができるためには、他者との関わりが重要な意味を持つ。なぜなら、さまざまな人との関係性の中で個人のとらえる世界や自己決定が生みだされるからである。子育て支援は、親が生き生きと

生きることに始まると考える。それは、自分らしく生きていくこと、また他者との関係の中で共に生きていくことである。そのためにはまず、一人ひとりの親に向けられる温かいケアのまなざしが大切である。

そして、地域というものが、すでにそこに存在しているのではなく、人と人との日々のコミュニケーション＝相互作用の集積から生まれてくるものである⁵⁾ ことを自覚し、親が主体的に行為することが重要である。親近感のある有機的結びつきという中で、子どもたちもまた、自らの力で子育てできていくのではないだろうか。

引用文献

- 1) 厚生労働省:平成21年度 全国家庭児童調査結果の概要,
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001yivt.html> (2012. 2. 3).
- 2) 大豆生田啓友: 支え合い, 育ち合いの子育て支援, 225, 関東学院大学出版会, 東京, 2006.
- 3) 真継和子: ケアリングの成立における「相互性」, 園田学園女子大学論文集, 40:127-138, 2006.
- 4) 岡田敬司: 人間形成にとって共同体とは何か 自律を育む他律の条件, ミネルヴァ書房, 京都, 2009.
- 5) 菅野仁: ジンメル・つながりの哲学, 日本放送出版会, 東京, 2003.